

「忘れ難きふるさと飯舘村に寄せて」

リンジー・モリソン

2016年5月13日～15日の間、関口グローバル研究会の第5回ふくしまスタディツアーに参加しました。

私にとって初めての福島であり、3.11以降の東北でしたので、どのようなツアーになるのか想像が付きませんでした。結果として非常に中身の濃い3日間となりました。学ぶことも、考え直させられたこともたくさんあったため、それらを簡単にまとめるのは難しいのですが、せめてその一部だけでもここに書き残したいと思います。

私は飯舘村に行って最初に思ったのは、「ここには放射線が出ている」と言われてもしっくり来ないということでした。周りの山は青々としており、ウグイスの透き通った鳴き声が遠くから聞こえていました。線量計の数字さえ見なければ、飯舘村は事故前と変わらず、平和で美しい春の風景でした。やはり放射線は人間の五感で感知できないという点において、これまで人間が直面してきた様々な災害とは大きく異なります。おそらく今まで、人間は自分の五感を使って危険性を判断してきたと思いますが、放射線に関してはそうは行きません。目で見ることができない、手で触れられない、匂いで分からないものに対し、不安と恐怖が募るのは当然のことだと思いました。

しかし、そうはいつても、安易に非科学的な考え方になってはいけないとも思いました。なぜなら、科学技術がもたらしたこの事故は、科学技術でしか解決できないからです。飯舘村では、ふくしま再生の会のメンバーの方々と東京大学・明治大学の教授たちが土や木の放射線計測や除染実験を行っています。実験によって、植物が放射性物質を吸収するメカニズムや、効果的な除染の仕方などを探究しているのです。彼らは放射線を非常に冷静で客観的な眼差しで見えています。先走る感情と風評被害の中で、彼らの科学に根ざした考え方、働き方がたいへん清々しく感じられました。

ツアーでお会いした農家の方々のお話を聞いて最も考えさせられたのは、人間と自然の関係についてでした。ちょうど飯舘村にいた時には、山で藤の花が咲いており、綺麗だねと皆で話し合っていました。しかし、地元の方々の目から見ると、それは都会の人間の発想らしいのです。藤の花のようなツル系の植物が生えているのは山が荒れている証拠だと説明してくれました。美意識も、ある時には無責任なものだなどと反省しました。

協働作業で牧柵を作っていた時、菅野宗男さんとお話しする機会がありました。今の政治経済はもっと人間の本質的な部分を大事にしないといけないとおっしゃっていました。利益だけを求めると、命や健康や幸福など、人間の最も大きく、最も大切な部分を見損ねてしまう。また、人間は地球の生態系の中で生まれ育ち、その恩恵を受けながら生活し、いずれはその土の中に帰りますから、私たちが地球の一部であることを忘れてはいけない、と。同じ日にタヌキを2匹見かけ、宗男さんの奥さん、千恵子さんが「里山が荒れてからタヌキも住む場所を失って可哀想だね」と話されたのが私にとって衝撃的でした。人間は一方的に自然を破壊するものだと考えがちですが、実際に人間の生活に頼って生きている動物や虫もたくさんいます。私たちはまさに自然の輪の中に生きているのです。

最後の日は小宮地区に向かい、大久保金一さんのお宅を訪ねました。青い山に囲まれた花畑が山の麓まで広がっており、本当に美しいところでした。春の柔らかい日差しが葉っぱを透けて木漏れ日となり、小川で大きな水芭蕉が純白な花を咲かせ、そこに立っているとお伽話の中にいるような気持ちになります。以前、この花畑は田んぼや野菜畑でしたが、事故が起きてから金一さんはそれらを花畑に変えました。大勢の人たちに飯舘村の花を楽しんでもらうために植えているのだと言います。自然と人間の共生、その目指すべき姿が金一さんの中に見えたような気がしました。

この頃、電車内で「Find My Tokyo」という広告が目につきます。東京の魅力を伝えるためのキャンペーンでしょうが、「My Tokyo」がそもそも存在しないから成り立つキャンペーンだと思います。ないからこそ、探さないといけないのです。ところが、飯舘村の村民は違います。彼らにとって、「私の飯舘村」は非常にはっきりしています。飯舘村には何百年の地縁と血縁関係があり、その生活の跡が土と山に深く刻まれています。彼らにとって、飯舘村は心の拠り所であり、真に魂が安らぐ場所です。ですから、村民に「他の場所へ移動しろ」と気安く勧めるのは軽率です。飯舘村を捨てるということは、魂の源を捨てることなのです。

このスタディツアーを通して、いくら新聞で読んでも、行ってみないと実態が分からないということを、身をもって経験しました。そのために、私はまた福島を訪ね、さまざまな方のお話を聞き、人間として進むべき道について考えを深めていきたいと思います。

<モリソン・リンジー・レイ Lindsay R. Morrison >

渥美国際交流財団 2016 年度奨学生。2006 年に早稲田大学国際教養学部で 1 年交換留学をし、2008 年 4 月文部科学省国費留学生として再び来日。早稲田大学文学研究科で研究生を経て国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科比較文化専攻で修士号を取得。現在、同研究科博士後期課程在学中。専門は日本研究および日本文化論。